

カルメン

芥川龍之介

青空文庫

革命前ぜんだったか、革命後だったか、——いや、あれは革命前ではない。なぜまた革命前ではないかと言えば、僕は当時小耳こみみに挟はさんだダンチエンコの洒落しゃれを覚えているからである。

ある蒸し暑い雨あまもよいの夜よ、舞台監督のT君は、帝劇ていげきの露バルコ台ニに佇たみながら、炭酸水たんさんすいのコップを片手に詩人のダンチエンコと話していた。あの亜麻色あまいろの髪の毛をした盲目もうもく詩人のダンチエンコとである。

「これもやっぱり時勢ですね。はるばる露西亞ロシアのグラランド・オペラが日本の東京へやって来ると言うのは。」

「それはボルシェヴィツキはカゲキ派ですから。」

この問答のあつたのは確か初日から五日目の晩、——カルメンが舞台へ登つた晩である。僕はカルメンに扮するはずのイイナ・ブルスカアヤに夢中になっていた。イイナは目の大きい、小鼻の張つた、肉感の強い女である。僕は勿論カルメンに扮するイイナを観ることを楽しみにしていた、が、第一幕が上つたのを見ると、カルメンに扮したのはイイナではない。水色の目をした、鼻の高い、何とか云う貧相な女優である。僕はT君と同じボックスにタキシイドの胸を並べながら、落胆しない訣には行かなかつた。「カルメンは僕等のイイナじゃないね。」

「イイナは今夜は休みだそうだ。その原因がまた頗るロマンティックでね。——」

「どうしたんだ？」

「何とか云う旧帝国の侯爵こうしやくが一人、イイナのあとを追っかけて来てね、おととい東京へ着いたんだそうさ。ところがイイナはいつのまにか亜米利加人アメリカの商人の世話になっている。そいつを見た侯爵は絶望したんだね、ゆうべホテルの自分の部屋で首を縊くつて死んじまつたんだそうさ。」

僕はこの話を聞いているうちに、ある場じょうけい景けいを思い出した。それは夜の更よけたホテルの一室おおぜいに大勢なんによの男女かこに囲まれたまま、ランプを弄もてあそんでいるイイナである。黒と赤との着物を着たイイナはジプシイ占うらないなをして見ると見え、T君にはほほ笑えみかけながら、「今度はあなたの運うんを見て上げましょう」と言った。（あるいは

言つたのだと云うことである。ダア以外の露西亞語を知らない僕は勿論十二箇国の言葉に通じたT君に翻訳して貰うほかはない。)それからトランプをまくつて見た後、^{のち}「あなたはあの人よりも幸福ですよ。あなたの愛する人と結婚出来ます」と言つた。あの人と云うのはイイナの側に誰かと話していた露西亞人である。僕は不幸にも「あの人」の顔だの服装だのを覚えていない。わずかに僕が覚えているのは胸に挿^さしていた石竹^{せきちく}だけである。イイナの愛を失つたために首を縊^くつて死んだと云うのはあの晩の「あの人」ではなかつたであらうか?……

「それじゃ今夜は出ないはずだ。」

「^{いい}加減に外へ出て一杯^{いっぱい}やるか?」

丁君も勿論イイナ党である。

「まあ、もう一幕見て行こうじゃないか？」

僕等がダンチエンコと話したりしたのは恐らくはこの幕合まくあいだつたのであろう。

次の幕も僕等には退屈だった。しかし僕等が席についてまだ五分とたたないうちに外国人が五六人ちようど僕等の正面に当る向う側のボックスへはいって来た。しかも彼等のまっ先に立つたのは紛まぎれもないイイナ・ブルスカアヤである。イイナはボックスの一番前に坐り、孔雀くじやくの羽根の扇を使いながら、悠々と舞台を眺め出した。のみならず同伴の外国人の男なん女にょと（その中には必ず彼女の檀那だんなの亜米利加人も交まじっていたのであろう。）愉快そうに

笑ったり話したりし出した。

「イイナだね。」

「うん、イイナだ。」

僕等はどうとう最後の幕まで、——カルメンの死骸しがいを擁ようしたホセが、「カルメン！ カルメン！」と慟どうこく哭するまで僕等のボックスを離れなかった。それは勿論舞台よりもイイナ・ブルスカアヤを見ていたためである。この男を殺したことを何とも思っていないらしい露西亞のカルメンを見ていたためである。

×

×

×

それから二三日たったある晩、僕はあるレストランの隅にT君とテエブルを囲んでいた。

「君はイイナがあ晩以来、確か左のくすりゆび薬指にほうたい繃帯していたのに気がついてるかい？」

「そう云えば繃帯していたようだね。」

「イイナはあの晩ホテルへ帰ると、……」

「駄目だよ、君、それを飲んじや。」

僕はT君に注意した。薄い光のさしたグラスの中にはまだ小さいこがねむし黄金虫が一匹、仰向けになつてもがいていた。T君は白葡しろぶどう萄酒うしゆを床ゆかへこぼし、妙な顔をしてつけ加えた。

「皿を壁へ叩きつけてね、そのまた欠片^{かけら}をカスタネットの代りにしてね、指から血の出るのもかまわずにね、……」

「カルメンのように踊ったのかい？」

そこへ僕等の興奮とは全然つり合わない顔をした、頭の白い給仕が一人、静に鮭^{さけ}の皿を運んで来た。……

(大正十五年四月十日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：田尻幹一

1999年1月27日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カルメン

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>